

## 「里海」について考える

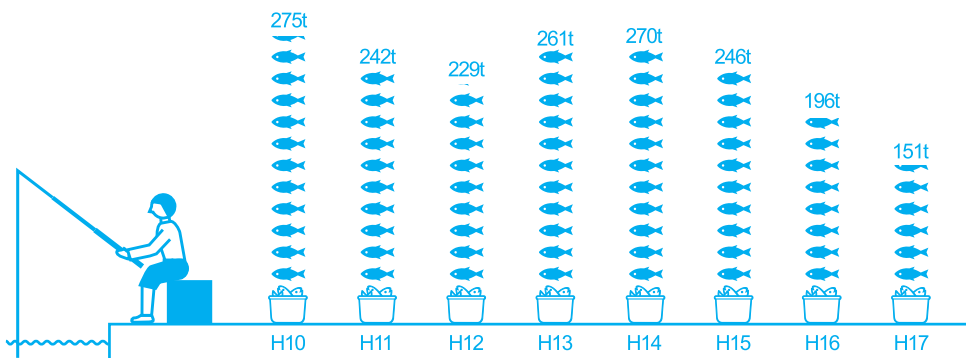


漁業が栄える坊勢



海運業の基地

「里海」とは、人間が適切な管理をすることで海辺が本来持っている生物多様性や生物生産機能、環境浄化機能を維持している豊かな海を指す言葉らしい。いえしまの海辺は、島の人たちの生活、特に漁業との関わりの中で管理されてきた豊かな「里海」なのだと思う。しかし近年、いえしまの漁獲量は減少傾向にあるらしい。その確かな原因は定かではないが、いえしま周辺の海の環境の変化も影響しているのではないかとされているようだ。そんな中、いえしまの漁業関係者自らが海辺の環境改善の取組みを始めたという話を聞いた。また、これまで海運の基地として栄えてきたエリアも、産業構造の転換期の中で今後のあり方が変わってくるかもしれない。いえしまの海辺は今まさに、人々の生活との関わりについて見つめ直し、新たな関わり方について考える時期に来ているのかもしれない。いえしまの昔からの海辺の使い方を再発見するとともに、新たな海辺の使いこなし方についても模索していくことで、いえしまの「里海」は守り育てられていくのだと思う。



姫路市の漁獲量(アサリ、エビ類、アナゴ、カレイ類、タコ類、スズキ)の推移

## 海辺を舞台に豊かな交流が生まれる島へ

「探られる島」プロジェクト2008は、平成20年の秋に家島本島・坊勢島での2泊3日のフィールドワークと大阪での4日間の会議を合わせた計7日間のワークショップの企画である。全国から多様な専門分野を持つ若者が集まり、「いえしまの海辺の楽しみ方」をテーマに宮地区にある空き家を宿泊拠点として海辺を探った。そして専門家のアドバイスを受けながら、メンバー全員で一つのコンセプトに沿って冊子にまとめた。それがこの「探られる島」プロジェクトブック04だ。プロジェクトの中では「今後のいえしまの海辺」についてもみんなで話し合った。高度経済成長期を中心に、海運業や採石業の基地として大きく変化してきたいえしまの海辺も、今後はそのあり方が変化していくように感じられた。そんな中でも僕らがいえしまの海辺を訪れて気づいたことは、いえしまの海辺は島の人たちの生活と密接に関係した「里海」と呼ぶことができる豊かな環境が残っており、都市部の人間が楽しいと感じられる海辺の過ごし方が潜在していることであった。だからいえしまは、今後むやみに「観光のための新しい海辺整備」をする必要はない、と僕らは考えている。今回僕らが感じた島の人たちの生活レベルでの楽しみ方を発掘し、島を訪れたひととの交流の中で、その楽しみ方を伝えていって欲しいと思う。僕らが今回の2泊3日のフィールドワークの結果から議論・考察した内容はいえしまの一側面を捉えているに過ぎないのかもしれない。いえしまにはまだまだ隠された魅力があるはずだ。だからこれからも僕らは新しい仲間を連れて、たびたびいえしまを探りに訪れたいと思う。



家島でのフィールドワーク



講師からのレクチャー



海辺の魅力に引き込まれる参加者